
三つ編みミウと、きれいなよっちゃん

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つ編みミウと、きれいなよつちゃん

【Zコード】

Z7264

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

主人公ヒロは、村上ミウと幼馴染。彼女の親友のよつちゃんに、ある日ヒロは告白されて　?　青春短編小説

「ヒロア。ひよひと待つてよつ」

歩き出した僕の背中に、美羽の焦る声がかかる。僕は足を止めて、振り返り、しうがないなあとばかりにつぶやく。

「早くしてよ。遅刻しちやうよ」

「じめんじめん」

美羽は口に食パンをくわえたまま、家の鍵を締めて、小走りに、ぴょいぴょい三つ編みの髪をはねながら門から出でくる。

僕は彼女が隣に並ぶのを確認すると、歩き出す。美羽は食パンを手に持ちかえると、それをかじつて、口をむじむじとさせ。ひつすらと美味しそうな顔を浮かべる。

僕は懐から単語帳を取り出し、それを見つめながら黙々と歩く。

「なあに、また勉強？」

美羽が、僕の顔の横から覗き込んでくる。近くに美羽の顔があり、美羽のどこか甘ったるこよくな、けれど彼女らしい、気分を落ち着かせる匂いが漂ってきた。

僕は美羽から遠ざけるように、単語帳を反対の方向へ持つていて、体を脇へ向かせる。

「いいだろ、別に。また、がり勉とか言つたら、今度こそ美羽を置いていくから」

すると、美羽は焦つたような表情を浮かべて、口の中にあつたものを「じくじく」と飲み干すと、すぐに喋り出す。

「そんなこと言わないよ。だから、置いて行くのはナシ」

僕はそんな美羽をちらりと見て、依然と口を尖らせたまま言つ。

「美羽も、勉強しといった方がいいよ。英単語のテストって一番成績に加算されやすいと、都合が良いんだ。今のうちにポイント稼いでおくチャンスじゃないか」

美羽は、興味がなさそうに「そうね」と返す。

そのまま歩いていると、道の先から「ひらひら」手を振って近づいてくる一人の女子高生の姿を認めた。美羽が、「よつちゃん!」と食パンに噛みついたまま嬉しそうにつぶやく。

僕は、近づいてきて僕の隣に並んだよつちゃんに向けて、「おはよ!」「ひつ」と軽く頭を下げる。

よつちゃんは僕に明るい笑顔を返してきて、「おはよ」「おはよ」と返す。よつちゃんは、僕たちと同じクラスの女子高生で、美羽とは親友の間柄にある。幼馴染で腐れ縁な僕たちと仲が良く、一緒にいることが多い。

よつちゃんは、茶色のロングストレートの髪を柔らかく払いながら、ぱつぱつとした目を僕たちに向けてきて、「ねえ」とつぶやく。

「今日の英単語のテスト、大丈夫そう?」

僕はよつちゃんの整った顔を見返して、今話してたところ、とつぶやく。

美羽は、食パンの最後のひとかけらを飲み干すと、僕の背後を迂回して、よつちゃんの隣に並んだかと思つと、いきなり彼女に抱きついた。

「こら、美羽!」

よつちゃんが、体を抱きしめてくる美羽の細い腕を取り払おうとしながら、照れ臭そうに言つ。美羽は、よつちゃん、よつちゃん、と息切れした声で不気味につぶやきながら、すりすりと彼女の頬に自分の頬をこすりつける。

僕はいつものことなので、別段気にせずに、再び単語帳に目を落す。

「やめなさいつてば!」

いい加減に痺れを切らしたよつちゃんが、美羽の肩をつかんで、無理やり体から引きはがした。美羽は、唇を尖らせて、キスを迫りながら、必死によつちゃんにしがみつこうとしている。

僕も、よつちゃんが気の毒になつて、片手をのばして美羽の顔を掴むと、それを無理やり後ろに押しやつて、よつちゃんから遠ざけ

た。

美羽は僕の手の圧迫を受けて、顔をのけぞらせながら、「ぐぐぐ」と唸っていたが、やがて観念したように身を引いた。

「まったくつれないなあ」

美羽は残念そうにつぶやいて、おとなしくよつちゃんの横に並ぶ。その手がちやつかりよつちゃんの手を握っているのに気づき、僕は息を吐く。

「何よお、その呆れたような顔は」

美羽がよつちゃんの腕にがしつとしがみつきながら、口を尖らせる。

「別に。美羽も、相変わらずだなあつて思つてた」

そう言つて单語帳のページをべらりとめぐる。よつちゃんは僕の单語帳を覗き込み、

「律儀に单語帳にまとめるのね。偉いわね」

と言つ。よつちゃんの端正な顔が間近にあり、頬によつちゃんの吐息がかかつてきて、僕はどぎまきしてしまつ。よつちゃんは美人だ。学年の男たちの間で人気がある。それもあつて、よく一緒にいる僕に向かつて、男友達が詰め寄つてくるといふことがある。迷惑な話だが、密かに僕もよつちゃんの近くにいれることをラッキーだなあと思つていたりもして、奴らの悪口を言える立場でもない。

「ねえ。問題を出してみて。私答えるから」

よつちゃんが单語帳の前で伏せていた顔を持ち上げ、上田づかいでそう言つてきて、僕はしどろもどろになりながら、「うん」「うん」とつぶやく。

美羽が、私も私もと話に参加したそつだが、勉強してない美羽が答えられるはずがない。

しうがないので、美羽が問題を出す側となり、僕は美羽に单語帳を手渡す。美羽は指定されたページを開き、そこに書いてある单語を読み上げる。

「ゴウエーアンメント」

美羽は眉をしかめて、気難しそうな顔で単語を読み上げる。

「ガヴァメントじゃなくて？」

「やうやう、ガヴァメンと」

美羽は、あはは、と乾いた声を上げる。駄目だ、こりゃ。

「私が代わるよ」

よつちゃんが、苦笑しながら、美羽から単語帳を受け取る。美羽は、不貞腐れたよつに頬を膨らませていて。美羽、撃沈。

「じゃあ、メジャー」

僕は即座に「手段、尺度」と訳を口にする。その速さに、美羽が一層不機嫌そうに僕を見つめる。

「それじゃあ、次は……」

そういひしているうちに、正門に着いた。

「うわーん、全然できなかつたよお」

美羽が、さほど気にしてなそつなその顔で不釣り合いな言葉を吐く。美羽は後ろの席に座つていたよつちゃんの首根っこに飛び付く。よつちゃんは幼子をあやすよつに、よしよし、と美羽の背中をなでる。僕はといつと、単語帳を開いて、行つたばかりの単語テストの採点をしている。

「よつちゃんはできた？」

美羽は少し身を引いて、よつちゃんと顔を向かい合わせて、そういう訊く。

「うん。一応」

よつちゃんは変わらぬ笑顔でそつそつと歩く。

「す」「お」「よつちゃん」

やう言つて、理由もなくがばつと抱きつく美羽。

僕はといつと。よしそとガツツポーズを作つて単語帳を閉じる。満点だ。

昼休みに入り、生徒が席を立つ中、僕も席を後にしようとする。

その時。

「ヒロ君。ひょっといい？」

よつちやんが美羽を引きはがして、席を立つ。

「何？」

「一緒に屋上で『飯食べない？』

よつちやんは胸の前で指を組み合わせて、視線をめぐらせながら言ひ。

こつも僕は教室で男友達と食つてゐるから、よつちやんの申し出は意外だつた。

「いいけど」

やう言つと、よつちやんはほつとしたような表情を浮かべて、「あのね、いつもヒロ君、購買でパン買つてるでしょ。今日私、お弁当作つて来たんだ」

僕は嬉しい気持ちになり、頬を緩めて「そつなんだ」とつぶやく。よつちやんの手料理、まさか食べれるとは。

「ここ」

やう言つて、よつちやんは僕のワイシャツの腕袖をつかみ、教室を出てこじつとする。

僕は取り残された美羽を振り返り、「美羽は？」とつぶやく。美羽はどこか違う方向を見つめていた。美羽にしては珍しい、無表情の顔をしていた。美羽は黙つて首を振つた。

僕はよつちやんに促されるまゝに、屋上に來た。

日差しが暖かく降り注ぎ、ほんわかと体を包み込む。その暖かさが風によつて揺らぎ、今度は横から涼しげな風が吹きつけてくる。僕はよつちやんと一緒に隅の方に行つた。よつちやんはレジヤーシートを持つて來たよつて、青いそのシートを屋上の角の辺り一面に広げた。

「どうぞ」

よつちやんが指でシートを指し示すので、僕は靴を脱いで「おじやまします」と上がる。

よつちやんはどこか嬉しそうな顔で、風呂敷を解いて、重箱を出

し、段をひとつずつ取つて並べる。

割り箸と紙皿をよこしてきて、僕が何もせずにぽかんとしていると、「どうだ」とにこやかに重箱を勧めた。

重箱には、色鮮やかなよつちゃんお手製の料理が敷き詰められた。僕は海老フライを一つ取ると、かぶりつく。よつちゃんがそれをじつと見つめてきて、僕は一口飲み干すと、大きくなずいた。

「おいしそよ、よつちゃん」

その言葉に、一瞬嬉しそうな顔を浮かべて、けれどそれをすぐに苦笑いに変える。

「よつちゃんつてその呼び方……」「

「ああ、『めん。好美ちゃん』

僕は慌ててそう言いなおす。よつちゃんは美羽には許しているけれど、その呼び名が好きではないらしい。前に美羽と一緒にそう呼んで、注意されたことがある。

よつちゃんはどこか赤くなつたその顔を俯かせて、ハンバーグを一つつまむ。

「好美ちゃんつてさあ、美羽とどこで知り合つたの？」

「もぐもぐとおにぎりを食べながら言つ、僕。

「私、受験の時に、美羽ちゃんと隣同士の席だつたの」

よつちゃんは、どこか懐かしげ。

「その時に、美羽ちゃんが話しかけてきたの。カンニングするの見逃してくれつてテストやる前に頼まれてさあ。冗談だと思つたんだけど。美羽ちゃん、すごく必死そうだった」

「おいおい、何やつてんだ美羽。

「結局許さなかつたけどね、そんなこと」

「美羽の奴、中学三年の時、勉強しないで小説ばっかり書いてたんだよ。それでテストの一ヶ月前になつて、慌てて勉強しだしてさあ僕は當時のことを思い出しながら、あきれ顔でしゃべる。

「ヒロ君は、美羽ちゃんとどのくらい前から一緒にいるの？」

「幼稚園の時からだよ。両親同士が仲良くなつてさあ、よく家族ぐる

みで付き合つてたんだ」

「道理でヒロ君と美羽ちゃん、仲が良いわけね
よつちやんは楽しげにそう話す。

僕たちはそのまま屋上で優雅なお昼のひと時を味わつた。教室に
帰ると、美羽が、ふてくされたように机に突つ伏していた。

「怒つてる怒つてる」

美羽の背中をちょんちょんと試してこいつてみると、ぐるりと体
を回してこぢりに回を、いーだ、と歯ぐきをのぞかせて僕に牽制す
る。

「よつちやんは私だけのものだもんつ。ヒロになんかあげないから
ね」

「はいはい」

「何よ、その、しょうがない奴だなあみたいな顔は。ヒロのその顔、
大つきらい！」

いつにも増して怒つている美羽に僕は、手を差し出す。

「ほり、貸して。今日の分」

美羽は僕をじっと睨みつけたまま、机の中に手を突つ込んで、一
冊のノートを取り出した。それを無造作に僕に渡す。

「今日はどこまで書いたんだ？」

僕はノートを開きながら、横田で美羽を見る。美羽は、ぽつりと
「さつちやんがみつちやんとコンビニでばつたり会う場面」とつぶ
やく。

僕は、四月九日と書かれたページを開くと、そこに書かれた文章
を読みだす。このノートは、美羽の書いた小説が書きこまれていて、
美羽は毎日昼休みになるとのノートに書きたし始める。授業が始
まる前のわずかな時間で、それを僕が読むという習慣になつていて。
僕はノートを読みながら、ふとよつちやんがじつとこぢらを見つ
めていることに気付いた。よつちやんはどこか悲しげな表情で僕を
見つめていたけれど、僕が振り向くと田を逸らした。

どうしてそんな表情をするのか、僕は気になつたけれど、そのま

ま何も言わずノートを読み続けた。

「ヒロ。帰ろ。」

HRが終わった途端に、席を立つて僕の腕裾ひつぱる美羽。僕は「まあそんな急ぐなつて」と机の中の教科書類を鞄に詰め込む。

「ヒロ君」

ふと声がして振り向くと、よつちやんが腕から鞄を下げて、立っていた。

「今日。一緒に帰らない?」

「いいけど」

僕がそう言つた時、美羽がぴたりと僕の腕を引っ張るのをやめた。そして、さつと鞄を持って、立ち去つとする。

「美羽?」

僕は美羽の背中へ向けて、訝しげにつぶやく。

美羽はぴょこんと三つ編みをはねあげて振り返り、美羽らしくない、どこかうわべだけの笑顔で、

「今日は私、一人で帰るからいいや」

そう言つてさつと教室を後にしようとする。僕はなんだか美羽の様子が気になつて、「美羽」と彼女の手を取つて止める。

「何。離してよ、ヒロ。」

「美羽。どこかおかしいぞ。こつもなら、よつちやんと一緒に帰つたといつてせがむのに」

美羽は視線を伏せて、「いいの。今日はそういう気分じゃないの」と言つて僕の手を振り払つて、歩き出す。

「なんだあいつ……」

僕が顔をしかめていると、よつちやんが僕の腕を引いた。振り向くと、彼女は伏し目がちに、「行こう」と言つて歩き出した。

廊下に出ると、もう美羽の姿はなかつた。

僕たちはどこか沈んだ雰囲気で、学校を後にした。よつちやんは黙つたまままつすぐ前を見て、しゃべらうともしない。くわつ、美

羽のせいだぞ。

僕は沈黙に耐えられなくて、あのさ、と呟いた。

「駅前に良い感じの雰囲気の喫茶店があるんだけどさ。よかつたら寄つて行かない？」

そう言つたのと同時に、よつちやんがヒロ君、と呼んで振り向いた。僕の言葉は遮られて、僕はじつと寄つちやんの顔をみつめる。よつちやんは真剣な顔をしていた。

「ヒロ君に、大事な話があるんだ」

大事な話？

僕はよつちやんの張りつめた雰囲気に、緊張して唾をじくじくと飲む。

「私、ヒロ君のことが、」

好きなの。そうつぶやいたよつちやんの顔を僕は食い入るように見つめた。

「え？」

思考が停止して、頭が真っ白になる。

「ずっと好きだったの。私と付き合ってください」

そう言つて、緊張した面持ちのまま、頭を下げた。

これ、何の冗談？ そうつぶやいて、よつちやんの眼差しを見て、僕は口をつぐんだ。

よつちやんは美羽の友達で、僕にひとつても数少ない女友達で、そんなよつちやんのことが好きだけれど でもそれは、そつちの意味の好きとは違う。

僕は顔を曇らせて俯き、あの……、とつぶやきかける。すると、その途端によつちやんが顔を上げ、さつと腕を伸ばしてきて、僕の手を握つた。

「お願い」

よつちやんの瞳は、雲を漫らせて、潤んでいた。陽光がその雲に当たつて、まばゆく輝いている。僕はこんな状況にもかかわらず、綺麗だな、と思つた。

僕はよつちやんの腕をそっと払つと、静かに言つた。

「じめん」

僕の言葉に、よつちやんは触れた瞬間に粉々に砕けそうな表情を浮かべ、頬に涙を滑らせた。

「美羽ちゃんなの？」

よつちやんのその目を見た途端、僕の心臓が大きく飛び跳ねた。今までに、よつちやんが一度も見せたことがない目だった。怒りと憎しみによつて、赤黒く燃えた炎が瞳の奥で渦巻いているようだつた。

「美羽ちゃんなんでしょう？」

僕はそんな目をするよつちやんに耐えられなくて、「よつちやん」とその腕を握つた。よつちやんはその手を払いのけ、にっこりと笑つた。けれど、まだ瞳の炎は消え去つていない。

「じめんね。突然。こんなこと言ひて」

僕は「ううん」と首を振る。

「嬉しかつたよ。ありがと、よつちやん」

そこで、よつちやんの瞳がいつものよつと優しいものに変わり、

「よつちやん、か」とふとつぶやいた。

「じゃあ、私ここでお別れなんだ。じゃあね」

そう言つて、曲がり角の道を駆けていくよつちやんの背中を、僕はどこか胸を締め付けられる心地を味わいながら、そつと見送つた。その時、がさこそと葉が擦れる音が聞こえてきて、僕は振り向いた。道路脇の茂みが揺れ、その上にぴょこんと三つ編みの片方が載つていて。

「美羽」

僕が呼ぶと、茂みの動きが突然ぴたりと止まつた。僕は溜息をついて、茂みの近くによると、そつとその背後をのぞいた。

「何、やつてんの」

茂みの後ろに座りこんでいた美羽が慌てた様子で僕をみやり、その拍子に芝生に尻もちをつく。

「これは……その……」

美羽は脇を向いて、言い訳を探すように視線をめぐらせる。僕は茂みの上にそっと腕を伸ばして、美羽に手を差し伸べる。

「「めん」

美羽は赤くなつた顔でそつと腕を伸ばして、美羽に手を差し伸べる。

「今の、全部見てたの？」

僕が言つと、美羽は萎れた顔をして、しょんぼりと頭をうなずかせる。三つ編みがぶらつと力なく垂れている。

「よつちゃんがヒロのこと好きなの、ずっと知つてたんだ、あたし美羽は、ほんやりとよつちゃんの去つていつた方向へ視線を向ける。

「ヒロは私のこと好きなの？」

美羽が突然、言つた。僕は顔を真つ赤にして、じぶんもじぶんなつて、「何言つてんだよ、美羽」とつぶやく。

「私だつて、ヒロのこと好きだもん」

美羽がさらつと、気になった風もなくそつと言つた。僕はもう頭から湯気が立ち上るくらい真つ赤つになつて、口をぱくぱくと開閉させる。

「ヒロつてそういうとこか鈍いから、こつちから言わないと、いつまで経つても気付いてくれそういうにないんだもん」

美羽は、んもう、と腰に両手を当てて溜息を吐く。

「美羽は、よくやつという恥ずかしいことが言えるよな」

やつと口にできた言葉がそれだつた。

「だつてヒロになら、こつこつともやつと言えやうんだもん」
美羽はけつらけつら笑つて自分の三つ編みの髪を弄ぶ。

「ヒロはどうなの？ 私のこと好き？」

僕はそう訊かれて、顔を伏せた。

「わからないんだ」

美羽は僕の顔を下から覗き込むように、「わからない？」とつぶやく。

「そりゃ、わからない。美羽つていつも一緒にいたから、好きだつて言つてもどういう意味で好きなのか、判断しにくいんだ」「いいじゃん、そんな細かいこと気にしなくて。好きつて言つのなら、それがどんな感情から来てるかなんか気にしなくても良いんだよ」

美羽が歩き出したので、僕も彼女に続く。

「僕つて結構モテるんだな」

ぽつりと口にすると、美羽がにこやかに笑いながら振り返る。「だつてヒロは顔も綺麗だし、背もそこそこだし、性格も優しいし、女の子に意外に人気なんだよ」

はじめて知った、そんなこと。

「一番近くにいる私が保証するわ。ヒロは良い男よ」

ありがと、と僕は美羽に笑いかけた。

僕は美羽の家の前まで来ると、美羽に「それじゃあ」と手を上げる。

「お返事は？」

美羽は口を尖らせて言つ。

「またいつか、じゃダメ？」

美羽はうーん、と頬に人差し指を当てて宙を仰ぎ、

「いいけど。何年後よ」

そう訊いた。

「わからない。もしかしたら死ぬまで来ないかもしれないよ」

僕がそう苦笑して言つと、美羽は三つ編みをぴょこんと跳ねさせて大きくうなずき、

「それでも良いよ。ヒロがお返事くれるまで私ずっと待つて」

そう言つて、美羽は手を振り返して、家の中に入つていった。

僕は美羽の背中を見送ると、はあ、と息を吐いて歩き出す。

何年後かはわからないけど、いつか美羽のこと、好きつてはつき

りと言えるようになれるのかな。

僕はふつと笑って、美羽の家の隣にある自分の家の門扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264j/>

三つ編みミウと、きれいなよっちゃん

2011年10月5日02時34分発行